

## 障害ある子も一緒に学べる

夢ちゃん、佐野夢果さんの学校生活が紹介されていた。写真のように朝日新聞 3 月 24 日朝刊だ。今年 1 月、金山の都市センターで夢ちゃんに会った。元気な声であいさつして、車いすを巧みに操作する姿が印象に残る。

リードから一障害があってもなくても同じ教室で学ぶ「インクルーシブ（包摂的）教育」。日本ではなかなか広がらないなか、静岡県掛川市の小学校に 4 年前、車いすの女子児童が初めて入学した。一緒に過ごすことで教員やほかの児童の「障害」への向き合い方も変わってきたという。

和田岡小によると、同じ教室でともに過ごすことで、ほかの児童に良い影響がみられるという。佐野さんは身の回りのことはほぼ自分でできるが、できないことがあった時は、同級生たちがサポートする。中山睦稀さん(10)は率先して手伝うタイプだ。昇降口では佐野さんが上履きに替えるのを手伝う。「当たり前なことだし、うれしい気持ちになる」車いすにかけたリュックを降ろしたり、ぬれた車いすのタイヤを拭いたり。自然にほかの児童たちも動く。「きょうだいにも優しくなったんですよ」。(母の) 富江さんは同級生の保護者から、そう言われたこともあるという。

この記事を読んで、なんだか元気をもらった。ここに、障害があってもなくても同じ教室で学ぶ「インクルーシブ教育」の教育的意義があると思う。映画「みんなの学校」上映会から考えてきたことだ。だが、保坂知晃記者は「進めぬインクルーシブ教育」と。

—2014 年に国が批准した障害者権利条約に基づき、文部科学省は「インクルーシブ教育システム」を推進している。ただ、障害児が通常学級で学ぶ例はなかなか増えないのが実情だ。同省によると、15 年度の全国の特別支援学校の在籍者は約 13 万 8 千人。少子化で子どもの数は減っているが、10 年前より 3 万人以上増えた。特別支援学校は計 1114 校で、112 校増えた。条約は「障害者が障害に基づいて一般的な教育制度から排除されないこと」などを求めているが、文科省は特別支援学校も「一般的な教育制度」の枠内にあるとの立場をとっており、「多様な学びの場を確保する」として、特別支援教育も推進している。障害児の就学をめぐるのは、13 年の学校教育法施行令改正で、就学先の選択では本人・保護者の意見を最大限尊重することになった。一方、文科省によると、公立小中学校の通常学級で学ぶ障害児の数は 13 年以降も約 2 千人余り（発達障害は含まず）で横ばいの状態が続いている。

「インクルーシブ教育」の課題はまだ多い。その動向に注目していきたい。

(2017 年 3 月 27 日)

